

## 橋のような建築

建築は長い間オブジェクトとして定義されていた。環境との対立を基本とするオブジェクトという形式への批評として、「孔」という形式を対峙させようと試みてきた。僕の頭の中には、絶えず、「オブジェクト（塔）」対「孔」という二項対立の図式が存在していた。多くの建築論がこの二項対立の図式に沿って書き続けられてきた。ピラミッド対迷路、オスの建築対メスの建築など、様々なヴァリエーションで呼ばれながら、この対立は建築論の中心の位置を占めてきた。

しかし、ポスト構造主義者がよく持ち出すクラインの壺の例を持ち出すまでもなく、実は塔の内側は「孔」なのであり、塔と孔とは同一の行為がたまたま違った形状として出現するに過ぎない。建築の側からすれば、「孔」をデザインしたものが、外側の環境から見れば「塔」として出現するわけで、「孔」と「塔」とは少しも対立しているわけではないのである。

その「孔」と「塔」という表面上の対立の背後にあるのは、入る／出るという対になった行為である。入るという行為に焦点があたれば、その建築は「孔」として感じられ、その孔から環境に向かって出ていく行為に焦点があたれば、「塔」として認識される。しかし、入ったものは出て行かなければならないという意味で、入ると出るとは切り離しがたい。建築に入っていくとは、その外側の環境から見れば出ていっているわけで、この二つの対立するかに見える行為は、実は同義なのである。そんな視点から、二項対立をいかに超えるかが、僕の建築の大きなテーマとなった。そのためには、塔と孔をつなぐ橋のようなものが必要だろうと考えている。たとえば粒という概念は、塔と孔をつなぐ橋のひとつである。その粒をどう作り、どう組み立てるかは、粒の本質と深く関わっている。

建築をどう作るか、すなわち施工方法とは、単なる工事の技術ではなく、その文化・文明の核心、あるいは今日風の別の言い方をすれば、社会の OS そのものなのである。どの OS（たとえばウィンドウズなのか、リナックスなのか）によってソ

フトウェアが書かれ、システムが動いているのか…。それと同じくらい大きく決定的な役割を、建築の施工方法は、社会の中で占めてきたのである。なぜなら、建築が人間と環境とをつないできたからである。人間というヤワで小さくて頼りないものと、その外部に存在する、大きくてあらあらしい環境という得体のしれないものの中間にあって、その両者をやさしくつなぐ働きを、建築がはたしてきたからである。その中間になにをどう作って、人間と環境をどうつなぐかという問い。文化の本質は何か、この文明とはそもそも何だったのかという問いと、この問いとはほとんど同義である。その問いに対する答えがすなわち建築なのである。

こんな話をすると、建築が社会の OS であったのは昔の話で、今ではそれがコンピューターの OS にとってかわったという声が聞こえてきそうだが、僕はそのように考えない。人間が身体という具体的な物質を持ち続ける限りにおいて、建築は OS として機能し続ける。もちろん、その OS は様々なありようをとりえるであろうし、想像もできないもの—たとえば衣服とか靴のような、極少のインターフェイスとして、身体と環境とをつなぐ役割をはたすかもしれないが、—それでも OS である事にかわりはない。この OS を軽視すれば、身体は支えを失い、立つ場所を失い、不安定な空中をさまよわざるを得ない。身体はそのつけを払わざるをえないのである。だからブーフーウーの三匹の子豚の話には時代を超えた説得力がある。子豚がいかなる物質を用いて、環境とその身体をつなぐかは、その子豚の本質にかかわる。より正確にいえば、かかわるところではないとして、その家を構成する物質こそその子豚の本質そのものなのである。

では、この OS にはどんなありようがあったのか。あるのか。西欧とは、石を積みあげる事で人間と環境をつなぐ社会であり、文明であったと定義してもよい。石を積みあげる（組積造）という施工方法には、様々な側面がある。ひとつは、石という重くてかたい素材を積みあげていくという事。そのようにして、堅固な壁を作り、そのようにして人間と環境とをつなぐというのが一つの側面である。

もう一つの要点は、石が、人間の手によって、ひとつひとつ積み重ねられていくという側面である。それは石の壁がまさに石のように堅固でありながら、一方できわめてヒューマンな存在でもあったのだと、言い換えていい。ここでコンクリートの堅固さと対比しながら、石の壁をもう一度眺めてほしい。石壁にはまず、ひとつひとつの石の単位というものが見えている。人間というヤワで弱い主体がひとつずつ積み上げる事で、石は始めて建築という全体に到達する。その決定的な制約条件が、その単位の大きさに反映している。大きすぎる石を人は扱うことができない。そのヒューマンな単位寸法があるおかげで、どんなに建築全体が大きくなったとしても、その大きな全体とわれわれの間で、石という単位の寸法が、仲介の役割をはたしてくれるのである。だから、どんなに大きな全体に対しても、とりつくシマができ、恐怖感を抱かないですむ。逆にコンクリートの無気味さは、それが無限にぬめぬめとつながっていて、そのよう仲介、とりつくシマがない点にある。先述の言い方を用いれば、組積造は、積まれた壁のマッシブな重たい壁であると同時に、粒子としての側面をあわせ持っていたともいえる。コンクリートは粒子的ではなく、組積造は十分に粒子的だったのである。

さらにこの単位なるものの実在は、西欧の世界に数学的な考え方を発達させる要因ともなった。単位としてどんな寸法を設定し、すなわち石をまずどんな大きさに切って、それをどう組み合わせれば、強く、美しい全体に到達できるのか。その試行錯誤がギリシャにおける数学的思考法の、特異ともいえる発達の鍵となったのである。

建築に限らず、ギリシャのあらゆるアートは、寸法、比例というものをすべての基本とした。組積造という方法論が、このような考え方を生み出したのであり、この考えは、その後の西欧のあらゆる美術を支配する事にもなったのである。

このようにして「単位」をもとに、あるいはひとつの「粒子」をもとに、壁は強く美しく、積みあげられていくのである。あくまでも人間の手で積まれた石の壁は、

取り壊したり手直しようと思えば、再び人間の手で「単位」へと分解していけばいい。もちろんレゴのように簡単に壊れるわけではないが、それでもコンクリートを壊す時のようなおおごとにはならない。西欧における建築の堅固さとは、ヒューマンな本質を持ち、人間という限界によって制限されるべきものであった。少なくともコンクリートが出現する 19 世紀までは。

ところが 20 世紀にいたって、この組積造的な社会システムが、完全に破壊されたのである。元凶はコンクリートであった。コンクリートも石のように、あるいは石以上に堅固である。その堅固さゆえに、この施工方法は世界を支配した。しかし、コンクリートには、組積造が有していたようなヒューマンな単位、人間との関係性というものが欠落していたのである。この新たに出現した、いかなる形にも造型可能で、しかも何よりも堅固なコンクリートという構造体の上に、何かのお化粧を貼りつけるというやり方が、20 世紀の一般的な建築の施工方法となったのである。それを超えるのが粒子としての建築ではないかと、僕は考えているのである。

3069 字